

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 20 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370272

研究課題名(和文) ボーダーランド表象の複合的編成 コーマック・マッカーシーの作品を中心に

研究課題名(英文) The Formation of Discourse on and the Representation of "Borderland": Cormac McCarthy's Western Novels

研究代表者

山口 和彦 (YAMAGUCHI, KAZUHIKO)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：20361214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：現代アメリカ文学における「ボーダーランド」表象や言説の複合的編成について、コーマック・マッカーシーの小説のアーカイブ資料の分析を中心に据え、追究した。とりわけ、人種的・階級的・性差的・宗教的・言語的・地理的・生物学的な「越境」を鍵概念にみると、そこには西洋白人男性中心主義的な幻想に支えられた「西部」起源のアメリカ性が転覆され、冷戦期アメリカにおけるアメリカ的自己と多文化共生主義との関係性が問い直されるなど、高度かつ複雑な「倫理」性が認められることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This project researches the formation of discourse on and the representation of the "borderland" in contemporary American literature. Focusing mainly on analyzing Cormac McCarthy's archival materials and bearing in mind the "border-crossing" of race, class, gender, religion, language, geography, biology, etc., this project demonstrates how the typical "American Character," based on the Western, white, male-centered notion of the American "West," is subverted, and questions the relation between the "American Self" and the multiculturalism of the Cold-War era. In so doing, this project clarifies the highly complicated ethical values inherent in McCarthy's works.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：ボーダーランド コーマック・マッカーシー アメリカ南西部 現代アメリカ文学

## 1. 研究開始当初の背景

「フロンティア」の存在と西部開拓が民主主義・個人主義・機会均等といったアメリカ的特質の源泉となったと論じたフレデリック・ジャクソン・ターナー以来、「西部」由来の「アメリカ」という考え方は人口に膾炙している。事実、「西部の制圧」を国民統一の基盤とし、「進歩主義(プロGRESSIVISM)」政策を打ち出した歴史学者にして第26代アメリカ大統領セオドア・ローズヴェルトに代表されるように、アメリカ人のアイデンティティの根源として「西部」は神話化され、その意味は問い直され続けてきた。この歴史的文脈において、広義のアメリカ「西部」に含まれるアメリカとメキシコ国境地帯を中心とする「ボーダーランド」の表象についてはこれまで多くの研究がなされ、豊かな成果が紡ぎ出されてきた。

アメリカ文学研究においてもヘンリー・ナッシュ・スミス『ヴァージン・ランド』(Virgin Land, 1950)をはじめ、「西部」を超歴史的なエデンの園と捉える文化表象の系譜を辿る一連の研究がなされていたし、近年では、アメリカ/メキシコの「ボーダーランド」表象の多様性・多義性をめぐり、ネイティブ・アメリカンやヒスパニック系の作家たちが文学的主題として取り上げるとともに、ポスト植民地主義批評やフェミニスト批評をはじめ、さまざまな批評的視座からの考察が活発に行われてきた。そこでは、西洋白人男性中心主義的な「西部」表象が、こちら側とあちら側、文明と野蛮、自己と他者といった二元論的境界思考を派生する植民地主義的・帝国主義的な無意識に発するものとして断罪されると同時に、抑圧されてきた側の民話・神話の再創造を通じた、あらたな民族的自己の構築を称揚する物語が肯定的に評価されてきた。

そのような民族的・性的・階級的マイノリティ的視座からの批判に貫かれた「西部」表象の歴史性を意識しつつも、本研究はあえて白人男性作家コーマック・マッカーシーによる(反)「西部」小説=「ボーダーランド」小説を研究の中心に据え、現代アメリカ文学の新たな展開を考察することを企図した。

## 2. 研究の目的

現代アメリカ文学における「ボーダーランド(アメリカ-メキシコ国境地帯)」表象の複合的編成について考察した。現代アメリカ小説を代表する作家コーマック・マッカーシーの作品を中心に据え、人種的・階級的・性差的・宗教的・言語的・地理的・生物学的な「越境」を鍵概念に、冷戦期アメリカにおける「ボーダーランド」表象、とりわけ、「ボーダーランド」とアメリカ的自己との関係性を追究する。冷戦期アメリカにおいて、ナショナル・アイデンティティの構築・強化のために「西部」という概念がどのように呼び戻され、ステレオタイプを超えて再構築されたのかを、

文学作品を題材に具体的に考察することにより、西洋白人男性的な幻想に支えられた「西部」起源のアメリカ性、および今日にまで至るアメリカの多文化共生主義、さらには広義のアメリカニズムの成り立ちを、主に「倫理」の観点から問い直すことにした。

## 3. 研究の方法

テキサス州立大学サン・マーコス校のアルケク図書館所有のウィットリフ・コレクション(the Southwestern Writers Collection and the Southwestern & Mexican Photography Collection)のアーカイブ資料の分析を研究の中心に据えた。あわせて、テキサス大学アーバイン校ハリソン・ランソム・センター所有の各種資料を含め、広範な資料収集と資料分析を行った。各施設においては、関連分野の研究者とのディスカッションを通して情報収集や情報交換を行った。

## 4. 研究成果

(1)アメリカ文学・文化における「カウボーイ」表象は、アメリカ西部の「フロンティア」表象と不可分な関係であり続けてきた。旧来、「フロンティア」は、「自己」と「他者」を区分する「境界線」として機能し、人種的・民族的「他者」との対照によって、アメリカ的「自己」の優越性を創出する言説であり続けてきた。したがって、「西部」は自己決定と自己信頼にもとづくアメリカ白人男性の道徳規律やアイデンティティを育むトポスとされ、ひいては、アメリカの国家アイデンティティの成り立ちと密接な関係にあった。冷戦期アメリカの「封じ込め文化」の言説では、アメリカ西部史における「フロンティア」の概念と共振しながら国家アイデンティティの再構築が志向された。そこでは「カウボーイ」は歴史性を消失し、シミュラクル化した文化表象ということが可能である。事実、冷戦期アメリカの「カウボーイ」とは、R・W・B・ルイスのいう「アメリカン・アダム」と同様に、アメリカ的「無垢」の象徴となり、「アメリカ」の支配的イデオロギーを共犯的に補強する物語構造の一部となったのである。

この文脈において、コーマック・マッカーシーの『国境三部作』(The Border Trilogy)の第1作『すべての美しい馬』(All the Pretty Horses, 1992)の主人公 John Grady Cole は「冷戦カウボーイ」と呼ぶことは可能である。しかし、他方、そのメランコリックともいえるほどに「ノスタルジア」に彩られた人物造型にはアメリカ的「自己」や支配的イデオロギーの成立を俯瞰し、批評する視座が与えられていることは重要である。同作品におけるアメリカとメキシコ国境もまた、「自己」と「他者」を想像/創造する「フロンティア」と捉えることできるが、「封じ込め文化」において、「自己」と「他者」の「境界線=ボーダー」引きは、あからさまな形で、しかも、

パラノイア的に行われたことに鑑みれば、「カウボーイ」表象がはらむイデオロギー性も鋭く問われることになるのは必然である。事実、物語はメキシコに「越境」した「冷戦カウボーイ」の「自己」の変遷を描き出しながら、自身の理想の限界を承知しながらも、あたかもその理想主義を敗北主義的な美学にまで高揚させるかのように、また、死への衝動に憑かれたように行動し続ける、主人公の自己規定の、ひいてはアメリカ的自己の起源の根源的暴力性を露わにすることになっている。

(2)「ボーダーランド」を舞台とする、マッカーシーの『国境三部作』の第2作『越境』(The Crossing, 1994)における、主人公ビリー・パーハムのイニシエーションの意味を「狼」のシンボリズム、「剥き出しの生」、高慢の罪、証人の責務といったモチーフに着目しながら考察すると以下のことが明らかになる。

『越境』の物語冒頭に置かれた牝狼譚におけるビリーの行動様式からは、彼がエコロジストとして狼猟を行うという博物学者アーネスト・トンプソン・シートンが抱えたパラドクスを継承する人物であり、アメリカの例外主義や超絶主義に依拠する、(自己矛盾した)自然観をもつ人物であることが分かる。また、物語において、牝狼を「崇高なるもの」として神秘化し、自然との同一化を志向するビリーの欲望は「アメリカ」の集会的な欲望を代表するものであるが、捉えた牝狼を故郷に返還するためにメキシコ側に「越境」すると、彼の、そして「アメリカ」の「崇高な」企図は「高慢な」企図へとその意味合いを変えてしまうように、「アメリカ」の自己定義のあり方が問われている。

物語において、皮肉な形で牝狼と同一視される(ある意味で「狼人間」となる)ビリーは、哲学者ジョルジュ・アガンベンのいう「殺害可能だが犠牲化不可能な生」=「ホモ・サケル」を生かされる存在となる。当初の目的が果たせず、牝狼をみずから手で銃殺し、アメリカに帰還したビリーの姿が、「人間の法からも神の法からも外に置かれている」ために羨望と憎悪という相反感情を人々に誘発することはその証左であるが、イノセンスの世界から切断されたビリーの企図が、キリスト教的な意味での「高慢」の罪と等価と見なされていることは偶然ではない。

事実、『越境』の後半は「父」なき世界においてビリーが罪の報いを受ける物語として結実していく。物語内物語である「神自身にとっての不利な証人」=「相手にとって不足のない敵」であることを目指した隠者の物語が示しているのは、ビリーが物語内世界において証人たることの責務を果てしなく負わされるという事態である。ビリーは幾多の人々の物語にひたすら耳を傾けるが、彼がそれらの物語から何を学ぶのか、旅路の果てにビリーは成長したのか、そのような問いを無

効にしてしまうほど、ビリーに背負わされた証人たることの責務は、人類共通の根源的な何かとして表現されている。

以上のようなビリーの自己の在り方を描くために「ボーダーランド」は、ロードナラティブ(リアリズム)的な直線性と神話的な円環性を共存させるトポスとして表象されている。

(3)『国境三部作』の第3作『平原の町』(Cities of the Plain, 1998)においては、カウボーイ(John Grady)と不幸な過去をもつ美しき売春婦(Magdalena)が禁断の恋に落ちるというウェスタン小説の定型がなぞられながら、メキシコ人登場人物たちの画一化・類型化が忌避されているように、アメリカ的「自己」とりわけ、アメリカ的白人男性主体とエキゾチックな「他者」としてのメキシコという二項対立が解体されている。そのような物語構造を介して、前者の「正義」だけでなく、後者の「正義」も浮かび上がることになるが、そこでは、両者に共通する破滅を選択する精神が躍動する様子が描き出されながら、アメリカ的自己と他者としてのメキシコの境界線が霧散するように、テキスト自体が「ボーダーランド」というトポスとして機能していることが分かる。このことが示唆しているのは、自らを開いていくアメリカ的自己のあり方であり、その倫理的可能性に他ならない。

実際に、上記「ボーダーランド」で展開する物語を俯瞰するメタ登場人物(Billy)の導入は、他者に対する倫理的責任の主題と不可分なものとなっている。物語で描かれる、ジョン・グレイディがマグダレーナに対する倫理的責任を果たすためには、エドゥアルドという敵=絶対的他者を必要とするというのっぴきならない事態は、奇妙な共感と連帯感によって二人を結びつけると同時に、二人の決闘の場は、それぞれの独我論の世界を突き抜ける場、つまり、絶対的な他者=敵同士が「応答可能性としての責任」を果たす場となり、さらには倫理的責任を履行する場へと昇華されている。この物語的トポスは、共同体=世界を維持するかのように、ジョン・グレイディの死=犠牲化によって閉じられるが、ここには「証言者」ビリーの存在があるからこそ、ジョン・グレイディが悲劇的英雄に転化するという語りのあり方が前景化されている。

だが、『平原の町』の「カウボーイ」の英雄化・神秘化を行うことを目的とする物語ではなく、「カウボーイ」が存在していた古い世界の言葉で「カウボーイ」なき新しい世界を語ることはできないことを「証言」する物語、つまり、「証言」についての(メタ)物語である。物語後半の主人公ビリーは死にたくても死ねない人間、死を選ぶことのできない人間、つまり「カウボーイ」のパロディとして表象されているが(ジョン・グレイディの生と死は悲劇的であり、ビリーの生は喜劇

的である)が、このことが示すのは彼が(そして誰しもが)「証人」の役割を課される宿命から逃れられないという事実である。

「証人」の役割を果たし続けてきたピリーがわずかに報われるようにみえる物語の最後に示されているものとは、倫理的責任は他者へと開かれたときに真の意味で歓待の精神に変連していくという真実、あるいは、期待や願望といえる。その線上で、すべての人間存在が倫理的責任の循環のなかに抱擁される未来に向けての祈りとして『平原の町』は解釈することができる。それは安易な楽観主義を忌避しつつ、「自己」の唯我論的世界観や悲観主義的運命論を越えようとする作者の倫理的意志の表明のようにも映る。

(4) 19世紀半ば、現在のアメリカ・メキシコの国境地帯(ボーダーランド)で先住民の頭皮狩りを行う一団の蛮行を描き出す『ブラッド・メリディアン』(*Blood Meridian, or the Evening Redness in the West*, 1985)は、「ボーダーランド」正史への対抗歴史として、また叙事詩的物語として高く評価される一方で、血と暴力と死の描写が充溢するこの小説の倫理観については、否定的に捉える見方も多かった。この小説についての批評の多くが虚無主義的な解釈を施してきたことは、あらゆる価値体系の相対化が極北に達した現代の知的潮流を照射するものかもしれないが、マッカーシー作品ほぼすべてにわたって単なる煽情主義に陥らないさまざまな暴力の主題が追究されているように、BMにおける暴力も複層的・多義的に表現されている。事実、二人の中心人物(the kidとthe judge)の人物造型に着目すると、暴力表象の問題系が倫理の問題系に接続し、ポスト近代あるいはポスト・ヒューマンとも形容される時代における倫理の行方と可能性を探る物語としてBMは再解釈できる。

「母」殺しの主体として描かれるthe kidの人物造型は、アメリカの西部への拡大(Western Expansion)を「成長」と捉える、アメリカの「歴史」記述の暴力性と結びつく。このことはウェスタン・ビルドゥングスロマンという文学ジャンルの慣習的テーマ フロンティアでの経験を通してアメリカ的人物の構築を果たす を内側から転覆し、さらには、終末論的な「ボーダーランド」における人間存在と自由意志といった存在論的問題系を前景化させる。一方、the judgeの人物造型には近代が到達した倫理相対主義的ニヒリズムをどう克服すべきかという課題 進歩思想や人間中心主義が破綻したポスト近代、あるいはポスト・ヒューマンの問題意識が刻印されている。彼は啓蒙的知性の到達点を示す人物であると同時に「暴力」の権化である。

物語において、彼自身、「ボーダーランド」の過酷な生を生き抜く暴力的存在であるthe kidは、the judgeの思想に完全に同一化しな

いがゆえにその根源的「暴力」の標的となり殺害される。だがthe kidの死が表象不可能なものとして表象されていることは、彼の存在自体がthe judgeの暴力に主体化/従属化されえないものであること、また、二人の暴力の関係性における弁証法が宙吊りにされる事態、さらには、偶発的な倫理、あるいは対抗倫理と呼ぶほかない何かへのかすかな希望が生じている。BMにおいて、the judgeの「暴力」に完全に与すことのない対抗倫理はすでに常に萌芽的なものとして表現されている。「人間」が排除され、「超人」だけが生きる世界がいかにも悲惨で醜悪なものになるのは想像に難くないが、「ボーダーランド」の片隅ではのかな火をつなぐ「人間」の営為=倫理の可能性は、「暴力」の地平のほるか彼方にある倫理なるものへの足掛かりとして示されている。

(5) 『血と暴力の国』(*No Country for Old Men*, 2005)の舞台となる、1980年代のテキサスとメキシコ国境地帯(ボーダーランド)では資本主義、ひいては新自由主義経済の自動装置のように麻薬抗争が繰り広げられている。主人公の保安官ベルは、本来それを取り締まるべき「法」を否応なく代表=表象する存在として描かれているが、物語内で「法」は麻薬抗争のシステムの一部、あるいは中心となっている点において問題をはらんでいる。『血と暴力の国』の「ボーダーランド」とは、単純に「法」の行使が機能しない土地というよりも、かつては「法」と見なされなかったものが「法」であるかのように振る舞うことが可能な圏域であり、その圏域をめぐる争いが行われる現代の資本主義世界の究極の様態、つまり、ジョルジョ・アガンベンのいう「例外状態」の圏域といえる。

アガンベンによれば、「例外状態」では、合法的な形を取ることができないものが合法的な形を取るものとして権力を代行するという逆説が可能となる。その意味で「例外状態」とは「法秩序を構成するパラダイム」の本質であり、統治のための暴力の独占が志向される圏域である。そこでは「暴力と法とのあいだの連関というあらゆる擬制」がなくなり、法とのあらゆる関係を断ち切った人間の行動が現れる。今日、「例外状態」は「惑星的な規模での最大限の展開を達するに至っている。法の規範的側面は統治の暴力によってもののみごとくに忘却され論駁されてしまっている」とアガンベンは論じているが、『血と暴力の国』の「ボーダーランド」はその実例と見なすことができる。

物語現在のベルは、日常としての「例外状態」のなかで、論理的にも精神的にもダブル・バインドに引き裂かれた人間として表象されているが、このことは「法」自体のアポリアをも指し示している。ベルは、保安官の仕事には「法」による制約のない神様と同程度の権力が与えられていると感じている一

方で、「法」が存在しないにもかかわらず「法」=権力を行使することの根源的矛盾に当惑している。つまり「法」は万能を装いながら、実は停止状態にあるか存在しない状態にあると感じているのだが、事実、非存在としての「法」は善良な市民の統治についてはほぼ万能であり、悪人を統治することは不可能である状況を物語はアイロニカルに描き出す。

『血と暴力の国』の「例外状態」がアメリカの「戦争」とアナロジカルな関係にあることは、主要登場人物たちがそれぞれ戦争トラウマを抱え、「戦争」によって人生を規定された人物たちであることから明らかだ。ベルの場合、かつての戦場で自己存在の中心が失われてしまったとノスタルジックに想像することで、「例外状態」としての現在のアメリカとその暴力性に組み込まれた自己のあり方をカムフラージュし、逆説的に、「例外状態」を生きる自己を担保するために「戦争」体験を抑圧されなければならないものとして語り続ける。

しかし、物語の終わりで描かれるのはベルが仮構としての超越的自我を措定することで、完全なるシニシズムに陥る事態を先送りし続ける事態である。「例外状態」に対処しきれないからこそ、ベルは保安官を引退する決意をするわけだが、同時に彼は決定論と自由意志の狭間で揺れ続けることを選択することによって、自己の暴力的主体のあり方をいったん受け入れ、その地点から新たな生き方の道標を模索し始める。これは、はからずも「例外状態」=「戦争」のアメリカに生き残ってしまうベルに可能な唯一の倫理的責任の果たし方と言えるのかもしれない。

以上、(1)から(5)で概略したように、マッカーシーの作品の「ボーダーランド」表象はすぐれて倫理的な主題と結びつき、現代の「アメリカ」や「アメリカ性」を問うものであることは明白であるが、今後は、「西部」起源と考えられてきた「アメリカ」性が、冷戦期における「南部」起源の「もうひとつのアメリカ」の言説構築にも大きな役割を果たしていたことを具体的に明らかにする必要があるだろう。つまり、アメリカ文学における「南部」と「西部」の再定位(リマッピング)を行い、アメリカ「南西部」文学の醸成・成立の背景と意味を明らかにしつつ、従来、「北部」あるいは「東部」の文学との対比によって担保されてきた「南部」文学、西部「文学」の定義、ひいては「アメリカ」「文学」を再定義する契機が生まれるように思える。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

山口 和彦、暴力表象と倫理の行方 コーマック・マッカーシー『ブラッド・メリディアン』論、関東英文学研究、査読有、8号、2016年、pp.1-10.

山口 和彦、シニシズムの先へ *No Country for Old Men* における「例外状態」「戦争」「暴力」、英学論考、査読無、44号、2015、pp.69-83.

山口 和彦、「呪われた企て」 コーマック・マッカーシー『越境』における「剥き出しの生」と証人の責務、東京学芸大学紀要 人文社会科学系 1、査読無、66集、2015、pp.7-17.

山口 和彦、夢の中で責任は始まるのか コーマック・マッカーシー『平原の町』における他者への倫理、供儀、証人、英学論考、査読無、43号、2014、pp.115-32.

山口 和彦、冷戦カウボーイの行方 『すべての美しい馬』における「永遠へのノスタルジア」、英学論考、査読無、42号、2013、pp.85-102.

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

山口 和彦 (YAMAGUCHI, Kazuhiko)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：20361214